

障害児と関わってみて

社会福祉学部社会福祉学科 2年 伊藤理奈

活動先：NPO 法人 プレママクラブ

放課後等ディサービス ドーナッツ MaMa

ゼミ：山本和枝

① 自分の成長と気づき

私は、サービスラーニングで「NPO 法人 プレママクラブ 放課後等ディサービス ドーナッツ MaMa」に 6 日間実習を行わせていただいた。実習先は、小・中・高の知的障害・身体障害・精神障害の子供たちが通う学童保育である。私は、これまで障害児と関わったことがないため、関わり方がわからず不安だった。また、障害児に対して「かわいそう」という感情があった。学生企画の遊びを考えるのにも、障害のことを考えて遊びを提案しても、担当者の方からはダメ出しばかりだった。子供たち全員が遊びに参加できるように考えないといけないことがとても難しかった。実習に行くのが不安で仕方がなかった。初日は、全員が肢体不自由で全員介護が必要であった。目が離せない状況で 1 人だけを見るのではなく、周りにもっと目を配らないといけないと感じた。2 日目は、10 人の子供に対し 4 人は介護が必要なく、6 人は車いすや杖を使う子供だった。違う施設で行われた夏祭りに参加したとき、いつもと違う環境になると元気で活発だった子供もおとなしくなっていた。その時こそ声をかけることで不安を取り除いてあげないと思った。この日に初めて学生企画の魚釣りを行った。不安でしかなかったが、担当者の方に手をうまく使える子そうでない子とチームを分けルールも変えるというアドバイスをしてもらい行った。子供たちに楽しかったと言ってもらえて安心した。しかし、竿が長すぎて操作しにくそうと気付いた。3 日目は、海水浴に行った。海水浴が楽しみだったのか子供たちは楽しそうだった。若い力を見せつけられた日であった。4 日目は、自閉症の子供が 1 人いた。担当者の方から、自閉症の子には声かけを気をつけなければいけないことを教えてもらったが関わる機会がなかった。その日は、子供たち同士での関わりで落ち着いたり、楽しんだりしている子供もいたが嫌な子とされるとパニックになり暴れたり叫んだりしてしまうことがあり、しっかり見ておかないといけないと反省した。5 日目は、学生企画の魚釣りを行った。前回の反省をもとに改善を行ったらスムーズに行えてよかった。6 日目は、音楽活動を行った。音楽はみんな共通で好きなのだとわかった。自由時間に自分たちが作った魚釣りで遊ぶ子がいてうれしかった。この 6 日間の実習で気づいたことは、コミュニケーションが大切だと気づいたことである。子供からの要望を待つのではなく、自ら働きかけていくことによって、1 日 1 日、1 人 1 人の様子がわかり、気分によって行動が変わるのに対して、柔軟な対応ができるとわかった。また、コミュニケーションをとることで、1 人 1 人の特性によって、この子はどこまで 1 人でできるのか、どこから手助けが必要なのかもわかり、臨機応変に対応でき子供たちのできることを伸ばすことにつながるということがわかることができた。そして、かわいそうだから手助けするこ

とは、逆にその子にとってかわいそうであり 1人でできていたこともかわいそうだから手助けするという感情がその子のできることを奪ってしまうことに気づき、コミュニケーションの大切さを痛感した。そして、自分の成長は、初めは障害児との関わり方もわからず、子供から関わってくるのを待っていたがそれでは子供たちは心を開いてくれず、その子に合った対応もできないことに気づき、自ら声をかけることを努力した。子供たちについてもっと知ろうという感情が芽生えたことが成長である。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

周りは田んぼがあり、自然豊かでお年寄りの方が多かった。自然に囲まれている環境は子供にとっていい環境だと思った。実習中にもあったように、他の施設と夏祭りなど交流を行うことでお互いの施設同士や利用者同士にとっていい刺激になるような活動がありいいと思った。

サービ斯拉ーニングでの経験を活かして

社会福祉学部社会福祉学科 2年 荻野勇一
NPO法人プレママクラブ
放課後等デイサービス ドーナッツM a Ma
ゼミ：山本和枝

はじめに

私が夏休み期間中に行った、NPO 法人プレママクラブドーナッツ Mama という施設での6日間、障がい児達と触れ合いつつ、施設のスタッフさん達に色々とお世話になった。その中で私が経験して成長したことと気づいた点や、自分が住んでいる地域や市民活動について取り組んでみたいと思ったことを述べようと思う。

私はドーナッツ Mama という非特定営利 NPO 法人でお世話になり、6日間施設での活動を参加させてもらった。見学当初、施設での取り組み方や、日程、どのような障がい児がいるのかについて教えてもらった。例えば、杖を突かなくては歩いていくことが出来ない子供や、言葉が分からなくて話すことが出来ないで、行動でコミュニケーションを取ろうとしている子供、一人では動くこともしゃべることも出来ず、誰かがいないと生活して生きていくことが出来ない子供などがいる。その中で、自閉症を持つ子供がいた。その子供はK君という小学生で、施設のスタッフさん達からはK君と呼ばれている。彼は、基本1人でいることが多く、スタッフさん達に暴言を言ったり悪態をついたりしている。私は、K君の事が気になった。K君は箱に入って誰かを驚かせたかったり、一緒かけっこしてタイムを競ったりした。プレママでは帰りの会があり紙芝居などを読んだりするのだが、K君は一人で本を読んだり、独り言や、隠れたりしていた。ここまで関わってみて分かったことがあった。それは、彼は自分の世界の中で浸しんでおり、施設のスタッフさんなどに声をかけられ、自分の楽しい時間を邪魔されたと思って暴言を吐いたりしていたということだ。私はK君が自分の楽しんでいる世界観を邪魔しないように優しく接して、K君のやりたいことをやらせたり、一緒に来て遊んで欲しいことがあったら一緒に遊んで楽しんだりした。その後は、K君と仲良く写真を撮って無事に活動を終えることが出来た。ここまでの体験を生かして自分が成長したことは、相手の気持ちを理解して分析で出来るようになり、そのためには今、相手がやりたいことや、したいことを素直にやらせてあげて、邪魔したりしないこと。今回はそれをうまく活用出来た為、自閉症を持つ子供と仲良くなることが出来た。それが今回の自分の大きな成長だと実感している。

私が実際に自分の地域で取り組んでみたいことは、自分の地域に住んでいる障害のある人たちの特徴や考えを理解するためには、コミュニケーションを多く取り組んでいき、支援していくことが必要だと思っている。今回のサービ斯拉ーニングでの活動のまとめとして、各ゼミの発表会があり、ゼミ合同で土曜日に行われた。私は、発表会に向けての制作の手伝いをしたのだが、担当したのが初めと終わりの言葉で、発表での読む部分なども少

なかった。不満があるわけではないが、正直なところあまりにも自分は非協力的で、皆のためにあまり役に立っていないのではないかと反省している。だが、このことを活かして、自分の住んでいる地域で市民活動などの支援活動を取り組んでいきたいと思い、私は、障害を持つ人たちと多くのコミュニケーションを取り、自閉症や身体障がい者たちなどの、どのような支援をして、生活を補助していくのかを考えて、実際に取り組んでいく事ができるようになって、多くの人達のために役立っていきたいと、私はそう考えている。

これまでの1年間で学んで忘れていけないことがあるとすれば、**自分自身の歩んできたこの道と、人を信じていく事**だと思う。1年前の自分はほとんど自分のためにしか動いてなく、一人で生きていき、他人に対する協力的な部分などが少なかったと実感しており、相手の事をあまり信じていなかったからだ。だが、ゼミを1年通して、人信じて協力していく楽しさに気づけたことや、1人で助けてもらうありがたさを知ることが出来た。私は、このことを忘れてはいけないと思っている。

「多くの出会いから学んだこと」

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 中島裕香

活動先：NPO法人 プレママクラブ

放課後等ディサービス ドーナッツMama

ゼミ：山本和枝

① 「自分の成長と気づきについて」

この一年間は、多くの人たちとの出会いの場であった。20年間で初めてのことが多くあり、障害者の人たちと向き合えることができた一年でもあった。サービ斯拉ーニングを行う前に、障害を持つ親御さんに関わる機会があった。その際に、健常者は普段の生活には支障ないことでも、障害者は多くの障害を持って生活していることを聞かされた。そして、自分たちも障害者がどのような生活なのかも体験することができたのだ。体験してみないと分からないことはいくつもあるのだと学ぶことができた。こうした体験をしたことで、サービ斯拉ーニングへの意欲も増したと思った。活動の初日から障害を持つ子供たちと触れ合ってきたが、どう接すれば良いのかが分からない状態からスタートした。自分たちが不安な気持ちを抱えたままの接し方だったため、子供たちも不安な気持ちだった。自分たちが戸惑ったらいけないと思い、翌日からは積極的に関わろうという気持ちになれた。そして、障害のそれぞれの特性に合わせて接し方を変えてみたり、一人ひとりの表情を見て何を訴えているのかなど少しずつ理解することができた。

日々の観察の中で、障害を持つ子供たちとどのように接したら良いのかが分かってきた。ほとんどの障害を持つ子は、自分自身の気持ちなどを自らの口で伝えることができない。だからこそ、行動や表情などを見て気づくことが大切だということを学ぶことができた。話せなくても気づいてあげれることによって、子供たちからの信頼性も生まれるのだと思えた。障害がある子供でもみんな無邪気で遊ぶ姿は、健常者でも同じだと思ったのだ。ただ生まれながらにして障害があって生まれただけにほとんどの暮らしは、健常者の人たちと何も変わらないということを教えてもらった。子供たちと関わるのに上手に関わるのではなく、失敗をすることによって気づけることに繋がることになる。だから、積極的に関わっていくことによって信頼関係が生まれてくるのだと思った。その場、その時によって何が適した支援になるのか判断するために、日々の観察力とアンテナの感度の高さが大切だと思った。サービスラーニングを通して、多くのことを学ぶために多くの人たちと出会うことができた。障害を持つ子供たちが暮らしやすい環境にしていくために自分らができることは何か。関わっていくことで、今まで分からなかったことや気づくことができなかったことを子供たちから教えてもらった。なので、これからもこの一年間の学んだことを生かしていけるように人との関りをしっかりと大切に自分自身ももっと大きく成長できるように頑張っていきたい。そして、これから先も、障害のある子供や成年の人たちと関わりが持てるように自らが働きをかけていきたい。



② 「活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について」

活動を通して、活動先では地域との関りを大切にしていると感じた。活動している際に、地域の施設に行く機会があった。こうした隣接での施設で関わっていくことはお互いの繋がりがあからだと思った。そして、地域の人たちの理解があるからこそ施設の運営ができるのだと思う。それぞれの支援学校や施設で関りがあから、地域で共に成長することができるのだと思った。施設が社会の関わりや地域との繋がりがこれからも深めていくためにも自分も勉強をしていきたいと思った。そして、施設が社会と地域をどう繋がっていくべきなのかを追求していきたいと感じた。まだまだ知らないことばかりであるため、これからも学んでいきたい。